Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-27

ディスカッション(神戸大学大学教育推進機構開設記念公開シンポジウム:学生の力を活かす教育システムをめざして)

沖村, 孝
沖原, 勝昭
橋本, 勝
濱名, 篤

(Citation)
大學教育研究,15:98-102

(Issue Date)
2006-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81004728

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004728

KOBE UNIVERSITY

ディスカッション

今濱名先生の方から問題の投げかけということで、それぞれのプログラムについてアセスメントというか効果をどのようにして説明していくのかということについて問い掛けがございましたので、まずそれについてもしご回答ができるようでしたらそれぞれの先生方からお話していただいて、後は橋本先生のお話にありますように授業と同じように、こういうフォーラムとかシンポジウムを報告者だけの一方通行になってはやはりよろしくないということで、またフロアーの方の参画を得て双方向のシンポジウムの形もとれればいいなと思っておりますので、時間が許せればまたフロアーの方々のご意見とかもお伺いしたいと思いますが、まず濱名先生の問い掛けについてお考えがあるようでしたらご発言をお願いしたいと思いますが、どなたか。では沖村先生。

○沖村

大変難しいご質問でして、今始めたばかりでどこまで我々が具体的な達成の目標、あるいはその評価をどうしていくのかということについては、具体的には考えておりませんけれども、今、ご質問いただいてどう考えるのかということについて思いつきですが申し上げます。まず、当然のことながら、学生の評価というような形で、フィードバックは考えていきたいと思っています。それ以外の客観的なデータとしては、神戸大学における研究テーマで、震災に関連したような研究テーマが増えていくということも一つの成果かなと思います。あるいは神戸大学からの情報発信が増えていくこと。あるいは人材が育っていくということ。このようなものが具体的な数値の形で見えてくるということが、この現代 GP あるいはむしろ私どもが所属しております都市安全研究センターという組織の目標になるかも分かりませんけど、そのようなことかなと考えております。

○沖原

PEP コースの取り組みですが、おそらく大学の戦略にうまく乗っかっているかどうかという視点は必ず出てくるでしょう。神戸大学の場合、「国際性豊かな総合大学」ということを謳っておりますので、何が国際性かと言われると非常に曖昧なところはありますが、具体的には、日本人以外の人たちとのコミュニケーションがどの程度できるかということは非常に大きな問題だと思っております。それから学生の満足度や学

生の進路との関係もやはり必要であろうと考えております。

第三点とすれば、大学の中での語学教育の位置付け・役割、こういうことについて何らかの見通し・あるべき姿を模索していきたい。おそらく各学部の専門性とどう有機的に関わるのか、こういう視点も私たちは持たないといけないと考えています。

○橋本

それでは岡山の方でお答えを用意します。

もし、私が本日追加的に配布したレジュメをお持ちであれば、§１の（3）というところをちょっとお読みいただきたいのですが、岡山が暴走しているということを説明する時に学生参画以外に岡山大学が暴走していることの例として、教員の個人業績評価がございます。平成 16 年度から本格的にもう動いております。ちょっとオーバーな言い方をしますと、解雇を視野に、正に視野に入れながら個人業績評価が既に動いているわけです。

しかもそこでは研究よりは教育の方がというスタンスが非常に強うございます。さて、そのことが何の関わりかと言いますと、個人業績評価において岡山大学が一つ非常に力点をおいているのは、量的な評価ではなく質的な評価です。個人業績評価においてもそれが目指されています。

そうしますと、例えば学生参画がどう評価されるかといった時にも、どういう量的指標が必要か、あるいは何を見ればそれが分かるかという話ではなくて、質的にそれがどう高まっているかということをいろんな角度からそれをチェックしていくことが目指されています。

ですから、一つは中期目標・中期結果との関係で、本学はこれをはっきり謳っておりますし、そういうことがしっかり検証過程の中で組み込まれているということになります。例えば、学生参画型で何ができたか、ということを大方の認識で共通認識できた場合、その次の提案が出てきた時の学内の対応がずいぶん違います。信頼度がだんだん高まってきたという捉え方をしたらよろしいかと思いますが、例えばレジュメでの関係で言いますと、§２の最初のところに、比喩的に PDCA サイクルというのを使っているんですが、本学はまずやりやすいところがスタートしています。

例えばシラバスの改善というのは比較的やりやすかったという側面があったのに対し、新しい授業科目の提案などというのは、最初は非常に抵抗が大きかったものです。従って最初から狙ってはいましたがなかなかうまくはいかなかった。学内の抵抗が大きかったわけです。

しかし年々これができた、あれができたという話が積み重なっていきますと、例えばオリエンテーションの一部を学生たちが実際に担当するということが、もう言わば当たり前になってきていますし、新しい授業科目の提案も、あぁそうかってなことぐらいで比較的スムーズに動きます。

ついでに申しますと、先ほどの DVD の中で紹介されていたあの催しの最優秀作、「知ってるつもりコンビニ」はもう既に平成 18 年度開講です。正式科目として開講します。

ですから、そういう一連の流れを見ておりますと、大学がそれをどう受け止めているかということがいろんなところから伝わってくる。一つは大学の各学部から、部局から、もう一つは一般の学生からの受け止め方、そういうものを全て総合して、全体的にいい捉え方をしているなという実感が様々に感じ取れます。

これを仮に文章化すれば何らかの報告書という形になりますし、それを私どもは一応評価の一種というふうに考えております。

これは第三者から見た時に評価に耐えうるかということは何とも言えませんけれども、そういう形で評価というのは考えております。

可能な限り今日の流れにくっつけますと、例えば学生による授業評価アンケートで何点とっているというのは、とりあえず教員の個人業績評価をする上で自動入力として教員毎に入っています。入っていますが、問題はそれが何点であるかということが評価されるのではなくて、そのことに対してあなたはどう思っているのか、つまりそれをどう改善しようとしているのか、どうしてきたのか、これからどうしようとしているのか、それが有効だと考えているかとかいうようなことを、いわば小論文的に入力をしていきます。それを第三者が見る、つまり評価者が見るという形が一例だと思います。

○川嶋

ありがとうございます。リフレクションを評価するということだろうと思います。

それでは、先ほど申しましたように多少時間がございますので、フロアーからの参画を得たいと思います。

橋本方式のように、ここで数人のグループになって何かディスカッションしていただいて、その中で優秀なグループを決めるというわけにはいきませんので、個人競争と言いますか個人競技でいきたいと思います。どなたがどなたに対してでもよろしいので、ご質問・ご意見ございましたら挙手をお願いしたいと思うのですが、いかがでしょう。ございませんか。じゃ西島先生どうぞ。

○西島

貴重なフロアからの質問の時間をとって申し訳ないんですが、手が上がらないようですのでちょっと私しゃべらせていただきます。

はじめに四人の先生方、今日は大変ありがとうございました。

岡山大学の取組は初めて聞かせていただきまして、薄々は聞いていたんですが現実感をもって勉強させていただきました。おおいに神戸大学でも考えてみるところが多いと思います。

一点だけ、濱名先生のおっしゃったことで、大学の戦略性のもとで、例えばGPをどう考えるのか、非常に重要な点だと思います。

神戸大学では実は現代GPが三つあって、加えて魅力ある大学院というのが六つとっています。さらに国際連携推進のプログラムであるとか、地域医療等々さらにいくつかございまして、こうしたものを全体から考えないといけない。現代GPだけの戦略というのは考えられないんですけど。いずれにしましても、教育に関して様々なプログラムを採択しておりまして、この観点からいかに神戸大学が教育に関する戦略度を絡めて考えるのかが非常に大事だと思っています。

残念ながら神戸大学の教育に関して目標であるとか検証とかありますけど、具体的なイメージでこういうふうな学生を作るんであるとか、一般的な国際性豊かな人材作るとかありますけれど、具体的なイメージというのはありません。

例えば一番分かりやすいのは、卒業生全員TOEIC 800点以上とか、そういうことを課してもいいと思うんですね。やろうと思えば本当に国際性豊かな学生を輩出する大学であればそれを課してもいいんですが、それは果たして全学的に適正な戦略であるかどうかちょっとまだ分からない状況です。

私が考えているのは、魅力ある大学院にしろ、現代GPにしろ、その他の取り組みにしろ、これは実は各部局なり全学共通なり各センターとのところにおいて、ある意味で一番強い部分でプログラムを開発してそれは採択されているわけです。そうしますと、こうしたプログラムを利用して強い部分を育てていただいて、その後でその全体を見回して神戸大学は一番強いところで教育に関してこういう具体的な戦略が作れるという形に持っていきたい。その意味で、方向性を考える、方向性をつけるという意味でこの様々なプログラムというのはありがたいと思っています。

ただ、これに応募するのに大変な労力を使って、先生方、研究する暇もないような状況なんですけど、いずれにしましてもこれをきっかけに、神戸大学の教育における強い部分が明らかになって、それを示してその後で具体的な神戸大学の教育における

こういう戦略を立てるというようなことが可能ではないかなと思っています。そういう意味できっかけになるのであれば、非常にありがたいと考えています。

○川嶋

ありがとうございました。今の西島機構長のお話をいただいて、今日のご報告者の方どなたかコメントございますでしょうか。じゃあ手短にお願いします。

○濱名

おっしゃる通りだと思いますけれども、先生方からするとこのGPがはやると非常に困るのは、忙しくなって結局花火で終わっちゃうという感覚があるのですね。

実は先ほどの沖村先生の話を聞いていると、うちの大学でもぜひそのプログラムまわしていただけないかなと思ったのですが、それが学外的に例えば岡山大学の橋本先生たちのお取組を真似る大学が増えたら、そのシステムの有効性が広く証明されていくという形があるでしょうし、あるいはそういうシステムなりプログラムを作ったノウハウ自体が、隣接のプログラム、強くないプログラムにどう影響していくかみたいなところが出てこないと、実は非常に労を多くして、最初は勲章欲しいのだけれども、勲章が四つも五つも出てくると、もういいっていう感覚になってしまうともったいないと思います。ある意味で戦略性というのは、神戸大学の場合は先ほど教育目標についてお話がありましたけど、その目標があっての戦略だろうと思いますので、そのあたりはおそらくプライオリティーをつけてやってらっしゃると思うのですが、その取れた勲章間のつなぎであるとか弱いところを、どう強化していくのかというところが、こうしたプログラム自体の狙いの一つなのだろうと思います。

もう一つは他大学への波及ということになって、波及すると今度はより評価の厳密さが求められるというサイクルだろうと思います。ぜひ、神戸大学では今後も県内の大学、全国の大学をリードしていただければと思います。

○川嶋

最後に温かいお言葉をいただき、ありがとうございました。

時間もまいりましたので、マイクの方は総合司会の前の方に戻させていただきたいと思います。四名の先生方どうもありがとうございました。